
ドラマ「星ひとつの夜」を勝手に補完

野々山静流

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ドラマ「星ひとつの夜」を勝手に補完

【Nコード】

N6281C

【作者名】

野々山静流

【あらすじ】

本編は渡辺謙さんと玉木宏さん主演の山田太一ドラマ「星ひとつの夜」をベースにしています。野々山が大樹の母親に勝手に会いに行った事実を知った夜。大樹は激怒したものの、野々山の率直な謝罪と自分への深い理解を知って大樹も心を開いた。その次のシーンは朝。海に見える公園を散歩する野々山と大樹。前のシーンは夜、大樹の部屋にいる二人で、次のシーンは朝仲良く散歩する二人。この夜に起きたことを腐女子的視点で妄想。

山田太一ドラマ「星ひとつの夜」で抜けている場面の妄想補完

野々山が功を焦りすぎて大樹の母親のもとに行ったことを知った後、大樹は野々山の出過ぎた行為に腹を立てながらも、野々山の率直な気持ちの吐露に少しずつ気持ちが和らいでいった。

大樹

「もう・・・こんなことは二度としないでくださいね」

野々山

「すまなかった、今回はちょっといい格好を見せたくて焦りすぎたようだ」

そう言いながらブランデーを飲み干す野々山を大樹は苦笑しながら見ている。

野々山は照れたように部屋の窓に移動し、大きな窓から外の外景を見ている。

「お父さんは何歳の時に亡くなったの？いや、言いたくなければ言わなくてもいいんだが」

その質問に唇をかみしめて答えない大樹。

「そうか、色々あったんだね。言わなくてもいいよ」

「いや、いい親父だったみたいですよ。俺は色んな人からオヤジに似ていると言われていて」大樹はそう言いながら2本目のブランデーのボトルを野々山の空のグラスに注ぐ。

「俺がものごころついた頃にはもうオヤジはいませんでした。病気で死んだということですが本当のことはわからないんです」

「ふーん」

野々山は大樹の横顔を眺めた。この億万長者の青年がどこかに漂わせている哀愁はそういう幼年時代の恵まれない環境からだったのか。「それであなたが・・・」

大樹は野々山の方をまっすぐに見て、なにか言いたげに口ごもった。なにか緊張した表情だった。野々山ははっとした。

「あなたが・・・ぼくのマンションに現れて、コート差し出してくれた時・・・」

野々山は心のざわめきを抑えながら大樹の次の言葉を待っている。

「あの、どういったらいいのか・・・今まで求めていた人が現れたというか・・・」

野々山はすべてを察した。できるならこのさびしい青年を抱きしめたいと思った。しかし、熟年である年齢の分別がそれを押しとどめた。

「わかった。全部言わなくてもわかる」

大樹はほっとしたように小さく微笑した。まるで子供のような無邪気な笑みだった。

そして窓際にいる野々山の近くに座り、あどけない表情で野々山を見つめた。

「今日は・・・ここにいてもらえますか？帰らないでください」

「え？」

動揺が野々山の全身を走る、しかしその心の揺れを見せないようにして野々山は勤めて冷静に言った。

「今日の夜だつてNY市場は開いているんだろ？市場見ないで大損したらどうする？」

「いいんです。90億が半分になって45億になっても俺には使い切れない金ですから」

大樹はこともなげに言う。

「だけど、ベッドは1つしかないんだろ？どうやって寝るんだ？」

そう言うってから野々山は自分の言った言葉の意味にあらためて気づいて赤面していた。

大樹はこともなげに

「ベッドは1つですけど、キングサイズですから十分二人でも寝られます。ひよっとしたら3人だつて寝られるかも知れない」と聞きようによつてはとんでもない事を涼しい顔で言っている。

この青年は・・・野々山は大樹の真意がつかみきれなくてさっきか

ら頭が混乱していた。

俺を誘っているのか・・・？それとも、単純に父親の代理として慕っているのか？

野々山はさぐるような目つきで大樹を見た。

大樹は立ち上がった部屋ドアを開けた。

「寝室はこの隣なんです。さあ、どうぞ」

大樹に促されて野々山も立ち上がり、大樹の後にしたがって廊下に出た。

「ここです。あ、今、電気をつけますから」

照明に浮かび上がった寝室は20畳ほどの広さに大人4・5人が寝られるような特大ベッドが1つ。枕元にテーブルがあつてミネラルウォーターと経済新聞。

ただ、それだけの何もない部屋だった。

「あ、そうだ、シャワー浴びますか？」と大樹。ベッドにどこからか枕をもうひとつ持ってきて二つの枕を並べている。

「あ・・・そうか、どうしようかな。君は？」

「俺はあなたの後で」

「俺はいいや。なんだか疲れた・・・」野々山はベッドに腰を下ろした。

なんとも落ち着かない。学生時代ならともかく、成人してから若い男と二人だけで寝室にいるなどとは初めての経験だった。

「じゃ、俺はシャワーを浴びてきますから。先に寝ていてください」

大樹は静かにドアを開けて寝室から出て行った。

野々山は落ち着かない気持ちのままにシャツとズボンを脱ぎ、ワイシャツとトランクスのだけの姿になった。ベッドに横になり、ふと横を見るとバフェットなどの投資本が無造作に

サイドテーブルに積み重ねられていた。

その本を手に取り読んでいるうちに翻訳もののまどろっこさもあり、野々山は少しくとうとした。

何分たつたのだろうか。野々山がふと目覚めると腕の中に大樹の頭

があつた。いつのまにか大樹がシャワーから寝室に戻ってきて野々山の腕の中に顔をうずめて寝ているのだ。

驚いた野々山が腕を動かそうとすると大樹は

「すみません。起こしてしまいましたか？」

しばらくこのままでいてもらえますか？こうしてると俺、安心するんです」

大樹は野々山の腕の中から顔を上げて甘えるように野々山を見つめた。

成人の男性とは思えないような小さな子供の目つきだった。

大樹は太い野々山の腕に頬をすり寄せ唇を当てた。

野々山は動揺しながらもこの青年のするままにさせていた。

そして大樹の髪を優しく撫でた。

そのうちに大樹はすうすうと小さな寝息をたてはじめた。

その穏やかな寝顔を見ながら野々山もいつしか眠りに引きこまれていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6281c/>

ドラマ「星ひとつの夜」を勝手に補完

2010年10月13日19時22分発行